

遊湯

ゆるり旅



宮城県・川崎町

青根温泉

旅行作家 野添ちかこ



伝統工法で復元された「大湯」。内壁は、茶室の炉壇をつくる土を京都から取り寄せて造った

お殿様の温泉場はお宝ゴロゴロ  
御殿ツアーで歴史トリップ



①ヒノキの優しい香りに包まれる「蔵湯浴司」



②高台に位置し、眺望のよい不忘庵の客室。レトロな趣で快適に過ごせる



③繊細な味わいと盛り付けの料理

青根温泉 湯元 不忘閣

2023年9月時点

住所:宮城県柴田郡川崎町青根温泉1-1 Tel:0224-87-2011 客室数:14室  
料金:1泊2食付き1人1万9,050円~(消費税・入湯税込み、1室2名利用時)  
アクセス:JR東北新幹線白石蔵王駅からバスで約1時間、アクティブリゾート宮城蔵王下車、送迎車で10分(要予約)

500年の歴史を紡ぐ湯屋  
政宗公を癒した湯に浸かる

「お殿様の湯」といわれる温泉は全国にいくつがあるが、こんなに立派な湯屋建築は見ることがない。頭上に見える幾重にも張り巡らされた太い梁に、思わず目が釘付けになった。壁も床も湯気抜き用の天井も、すべて青森ヒバ。脱衣かごが整然と並び、余計なものはない。端正という言葉がよく似合う。

「湯元 不忘閣」は江戸時代、伊達藩主の保養所だった温泉場で、「大湯」は天文15(1546)年にお殿様の入る御殿湯として造られた。明治の大火で湯船の石組みだけが残り、その後再建。2006年まで共同浴場として使われていたが老朽化のため閉鎖、2年の歳月を費やして不忘閣の内湯として復活した。「独眼竜」の異名で知られる17代当主の政宗公も入った湯船である。この歴史ある湯殿を再現するために質のよい建材が集められた。

大湯閉鎖に伴って新たに造られたのが「蔵湯浴司」だ。さすがお殿様の保養所、古地図を見ると蔵が5つもある。現在残っている蔵は3つで、そのうちの1つを湯殿とした。湯船は8年ごとに替えていて、2023年5月に入れ替えたヒノキの浴槽で3代目。チェックインと同時に埋まる人気の貸切風呂というから、宿に到着したら空き時間を狙って入っておきたい。

その他の貸切風呂「亥之輔の湯」と「新湯」(改修工事中・2023年11月オープン予定)は大湯と同じく、洗い場もカランもなく湯に浸かるだけ。洗い場付きの温泉は男女一つずつあるのみだ。温泉の湯はクセがなくやわらかい。ほのかな灯りに照らされて、心を無にしてただじつと湯に浸かる。静寂の時間が流れていく。

毎朝8時50分から行われる「青根御殿ツアー」は、宿の歴史や文人墨客に関わる品々が展示された御殿を、女将の佐藤真由美さんが解説する。「不忘閣」の名は政宗公が「この湯をきつと忘れないだろう」と感嘆したことから付けられたのだが、女将によると「『不忘閣』は青根御殿のことを指している」という。現在は泊まることはできないが、優美な意匠は一見の価値あり。ツアーでは「山本周五郎氏の小説『樅ノ木は残った』のモデルとなった木はあれです」などの裏話も聞けて実に楽しい。

伊達政宗公の父親・輝宗公の甲冑や姫君たちが使った豪華絢爛な螺鈿の道具箱など伊達家関連、与謝野晶子をはじめとした文人墨客ゆかりの品々などお宝がゴロゴロ。時の蓄積が年輪のように宿の厚みにつながっている。

国の登録有形文化財に指定されているこの宿は、古い分建て増しをしていて、客室棟の不忘庵では階段を3階か4階分くらい上らねばならない。足腰の弱い人が泊まるときは、風呂に近い西別館を予約することをおすすめする。



青根御殿に残る伊達輝宗公の甲冑



伊達家ゆかりの品々が展示されている



雪景色に佇む青根御殿。夜はライトアップされる



湯上がりにコーヒー、地酒、豆菓子などの提供も



読者プレゼント♪ 3名様

おにぎり乗せこけし 1個

ほっこり気分になれる、小指サイズのこけし(約4cm)。手づくりなので一つひとつデザインが異なります。

巻末のアンケートにご記入の上ご応募ください